

バスク語の2種類のコピュラ文の類型論的な位置づけ

石塚政行

東京大学大学院・日本学術振興会

1. はじめに

バスク語には2種類のコピュラ文がある。以下では、(1A) に代表される構文を A タイプコピュラ文、(1B) に代表される構文を B タイプコピュラ文と呼ぶ。

(1) A. *Maji haundi-a da*¹.

マデイ 大きい-SG COP(izan).PRS.A3S

「マデイは大きい」

B. *Maji eri dago*.

マデイ 病気 COP(egon).PRS.A3S

「マデイは病気だ」

A タイプと B タイプは次の点で異なる。形式的には、A タイプのコピュラ補語には形態素 *-a* が付加されるが、B タイプでは付加されない。または、A タイプのコピュラ動詞には *izan* が用いられ、B タイプでは *egon* が用いられる。意味的には、A タイプは恒常的な属性を表し、B タイプは一時的な状態を表す、という違いがある。

この違いは Stassen (1997) の一価述語文の類型論における Adjectival N-L-Switching の 1 例として捉えることができ、実際、彼もバスク語を例として挙げている。ただ、A タイプを名詞述語文と関連づけるのは比較的容易だが、(特にフランス方言における) B タイプコピュラ文がどういう点で「所在文的」なのかは Stassen においては明らかではない。Stassen (1997: 188) は、述語となる形容詞が斜格・副詞的格で標示される点が、所在文と相似なのであると説明しているが、バスク語の例はこれに当てはまらない。

本発表では、B タイプのコピュラ文の補語となる語句が、描写構文における描写句としても機能することに着目する。Schultze-Berndt & Himmelmann (2004) が指摘するように、描写句と連用修飾句は意味的な連続体である。ここで、所在文の述語を構成する場所表現は、連用修飾の機能を持つ。事象の生起する場所を表す連用修飾句として用いられた場合の場所表現は、参与者の位置をも表現しているという点で描写句でもある。よって、バスク語における B タイプコピュラ文と所在文の類似点は、その補語が連用修飾句／描写句として機能するという点に求めることができる。

2. Adjectival N-L-Switching

Stassen (1997) は、一価述語文の表現する意味を、「行為または状態 (動詞) / 類への帰属 (名詞) / 所在」および「属性 (形容詞)」の 4 つに分け、前 3 者の範疇のプロトタイプ的な表現形式を検討している。その上で、これら 4 つの意味範疇が、どのタイプの表現形式で表されるかをサンプルの各言語について調べ、詳細な類型論を展開したものである。

Adjectival N-L-Switching とは、「形容詞」の意味範疇が、「名詞」タイプの表現形式と、「所在」タイプの表現形式の 2 通りで表される現象である。この現象が見られる言語では、次の一般化が成り立つ。

¹ 特に注記のない例文はすべて発表者が Saint-Michel で Jeanne Ourthiague 氏の協力によって得たものである。同地はフランス低ナファローア方言の地域である。文献から引用した例文のグロスに適宜改めた。

(2) The tendency of Adjectival N-L-Switching

In a language with nominal–locational switching for adjectives, the nominal option will encode the more time-stable reading. (Stassen 1997: 193)

すなわち、「名詞」タイプの表現形式は、「所在」タイプの表現形式より「恒常的な、時間経過による変化を受けない」と考えられる事象を表す傾向があるのである。

Stassen (1997: 180, 193) は、バスク語にも Adjectival N-L-Switching が見られると考えている。確かに、バスク語の A タイプコピュラ文は恒常的な属性を表し、その名詞述語文との関連性は比較的明らかである（後述）。一方、B タイプコピュラ文は一時的な状態を表すが、その所在文との関連性についての Stassen の説明は、完全に妥当とは言えない。

問題は、バスク語フランス方言についての説明にある。フランス方言では多くの場合、A タイプと B タイプでコピュラ動詞を区別せず、両方の場合に *izan* を用いる。そのため、両者はもっぱらコピュラ補語の形式の違いによって区別されることになる。Stassen (1997: 193) は Lafitte (1944) などに基づいて、「形態素 *-a* が付加されるか、*-ik* が付加されるか」によって A タイプと B タイプを区別している。しかし、一時的な状態を表すコピュラ文には、(1b) のようにどのような形態素も付加されないコピュラ補語が用いられる場合もある。Stassen の述べ方では、(1b) のような場合を B タイプに含めることができないので、問題である。2つのコピュラ文の違いは、「形態素 *-a* が付加されるかどうか」という点に求めるべきである。

つまり、Stassen (1997) の説明はバスク語フランス方言には完全には当てはまらない。以下では、まず A タイプコピュラ文と名詞述語文の類似について簡単にふれ、次いで B タイプコピュラ文と所在文の並行性をどこに求めるべきかを検討する。

2. 名詞述語文と A タイプコピュラ文

名詞述語文は、主語者が何らかの類に属することを述べる文である。「男である」や「女である」のように、時間経過による変化を受けないと考えられる述語がプロトタイプの名詞述語である。バスク語におけるプロトタイプの名詞述語文は次のようになる。コピュラ動詞には *izan* が用いられ、補語となる名詞には形態素 *-a* が付加される。これは、まさに A タイプコピュラ文である。

(3) *Mañex gizon-a da, ez=da emazte-a.*

マネシュ 男-SG COP.PRS.A3S NEG=COP.PRS.A3S 女-SG

「マネシュは男だ、女ではない」

A タイプのコピュラ補語には、(3) の名詞、(1A) の形容詞のほか、(4) の属格名詞句や、(5) の内格連体形の名詞句が、それぞれ形態素 *-a* を伴って生起することができる。なお、*-a* は (4) に見られるように、複数形 *-ak* を持ち、主語者の数に一致して変化する。

(4) *ardi hoiek gure-ak dira.*

羊 それ.PL 1PL.GEN-PL COP.PRS.A3P

「その羊は私たちのものだ」

(5) *ni Tokio=ko-a naiz.*

1SG 東京=INE.ADN-SG COP.PRS.A1S

「私は東京の者です」

ここで注目すべきなのは、形態素 *-a* と冠詞 *=a* の同音同形性である。冠詞 *=a* は定名詞句にも不定名詞句にも使われる限定詞で、数によって語形変化し、単複を区別する。

- (6) *emazte=a=k arno gorri=a edan du.*
女=SG=ERG ワイン 赤い=SG[ABS] 飲む.PFV PRS.A3S[E3S]

「女は赤ワインを飲んだ」

- (7) *gizon=ek xagarr=ak jan tu-zte.*
男=PL.ERG リンゴ=PL[ABS] 食べる.PFV PRS.A3P-E3P

「男たちはリンゴを食べた」

冠詞 *=a* と A タイプの補語における *-a* が、同一の形式と形態的特徴を有することは、これらの形態素が同一のものであるか、少なくとも深く関係していることを示唆している。A タイプの補語の *-a* が冠詞であると仮定すると、A タイプの補語は名詞句と同様の構造を持っていることになる。(8) のように、名詞のない名詞句が可能であることも、これを支持する。

- (8) *haundi=ak ttipi=en gibel=ean dira.*
背が高い=PL 小さい=PL.GEN 後ろ=INE 居る.PRS.A3P

「背が高い人たちは小さい人たちの後ろにいる」

3. 所在文と B タイプコピュラ文

所在文は、主語者がある位置に存在することを述べる文である。バスク語の所在文の述語として用いられる主な動詞には *izan* と *egon* の 2 つがある。一般に、フランス方言では *izan* が使われることが多いが、低ナファロア方言では *egon* も併用される。スペイン方言ではもっぱら *egon* が使われる。

- (9) *Mañex eliz=an {da/dago}.*
マネシュ 教会=INE[SG] {居る(*izan*).PRS.A3S/居る(*egon*).PRS.A3S}

「マネシュは教会にいる」(フランス低ナファロア方言)

- (10) *Jon eliz=an dago.*
ヨン 教会=INE[SG] 居る(*egon*).PRS.A3S

「ヨンは教会にいる」(スペイン方言)

ちなみに、所在文で *egon* を用いるスペイン方言では、(1) のように、A タイプでは *izan* を、B タイプでは *egon* を用いる。低ナファロア方言では、A タイプでも B タイプでも *izan* を用いるが、B タイプでは *egon* を用いることもできる。すなわち、B タイプコピュラ文は所在文と同じ動詞を述語に要求する。

- (11) A. *Mañex ixil-a da.* B. *Mañex ixil {da/dago}.*
マネシュ 静か-SG *izan*.PRS.A3S マネシュ 静か {*izan/egon*}PRS.A3S

「マネシュはもの静かな人だ」

「マネシュは静かにしている」

問題は、コピュラ補語である。前述したように、フランス方言では、A タイプと B タイプはもっぱらコピュラ補語の形式の違いによって区別される。B タイプコピュラ文の補語と、所在文の場所表現の間に何か共通点はあるだろうか。本発表では、次の事実に着目する。

Bタイプのコピュラ補語は、描写句として機能する。Aタイプのコピュラ補語は描写句にならない。ここで、描写句とは、主節の述語の他に、主語または直接目的語と主述関係を結んで命題を構成し、随意的であり、連体修飾句ではない要素であり、主節の表す事象と同時に成立している事象を表すものを言う。

Bタイプのコピュラ補語には、職業を表す名詞、状態を表す一部の形容詞、叙述詞²、具格名詞句、内格名詞句など、多様な語句が現れるが、これらは全て描写句として機能する。

- (12) *ene anai=a artzain da.*
 1SG=GEN 兄=SG 羊飼 い COP.PRS.3SG
 「私の兄は羊飼いをしている」
- (13) *ene ait=a hunat hel-du da artzain.*
 1SG=GEN 父=SG ここ.ALL 来る-PFV PRS.A3S 羊飼 い
 「私の父は羊飼いとしてここに来た」
- (14) *Mañex prexo da.*
 マネシュ 収監された COP.PRS.A3S
 「マネシュは収監されている」
- (15) *Mañex kantuz ari da prexo.*
 マネシュ 歌って PROG PRS.A3S 収監された
 「マネシュは監獄で歌っている」
- (16) *dute=a hotzik da.*
 茶=SG 冷たい COP.PRS.A3S
 「茶が冷たい」
- (17) *dute=a hotzik eda-ten du-t.*
 茶=SG 冷たい 飲む-IPFV PRS.A3S-E1S
 「茶を冷たくして飲む」
- (18) *Pintto ametx=e z da.*
 ピンチョ 夢=INST COP.PRS.A3S
 「ピンチョは夢を見ている」
- (19) *Pintto=k xagarr=a jan du ametx=e z.*
 ピンチョ=ERG リンゴ=SG 食べる.PFV PRS.A3S[E3S] 夢=INST
 「ピンチョは夢でリンゴを食べた」
- (20) *Maji prex=an da.*
 マデイ 急ぎ=INE COP.PRS.A3S
 「マデイは急いでいる」
- (21) *Maji prex=an johan da aitam=en etxe=rat*
 マデイ 急ぎ=INE 行く PRS.A3S 両親=PL.GEN 家=ALL

² 連体修飾機能を持たず、Bタイプコピュラ補語や描写句としてのみ機能する語類。Rijk (2008) の *predicative* に当たる。

「マディは急いで両親の家に向かっている」

ここで、Schultze-Berndt & Himmelmann (2004) の指摘によれば、描写句と連用修飾句の境界は明確なものではなく、両者は連続体をなしていると考えられる。一つには、ロシア語の具格名詞句やドイツ語の場所前置詞句のように、描写的意味も連用修飾的意味も表しうる構造が様々な言語に見られることがそれを示している。例えば日本語でも、格助詞*で*を伴う名詞句は、描写句にも連用修飾句的にも機能する。

(22) ジョンが魚を**裸で**食べた。

(23) ジョンが**裸足で**歩いている。

(24) ジョンが**片足で**立っている。

さらに、連用修飾構文と明確に区別できる描写構文を持つ言語において、従来連用修飾句として分析されてきた様態や場所や時間といった意味が、連用修飾構文ではなく描写構文で表されることがある。

(25) Yakunytjatjara (Pama-Nyungan, Australian)

wala-ngku=ya karlarl-itja-ngku ngurra ilawiti-nma

quickly-ERG=3PL.SBJ daylight-ASSOC-ERG camp set.off.to-IMP.IPRF

“You should set off to camp quickly, while it is still light.” (Goddard 1985: 61)

(26) Warlpiri (Pama-Nyungan, Australian)

wirriya-rlu ka kiji-rni watiya pirli-ngirli-rli

boy-ERG NPST throw-NPST stick hill-ABL-ERG

“The boy is throwing a stick from the hill.” (Hale 1982: 269)

バスク語にも、描写構文と連用修飾構文の連続性を示唆するいくつかの証拠がある。まず、B タイプのコピュラ補語になる語句のうち、形容詞、具格名詞句、内格名詞句は、様態や場所・時間といった連用修飾的意味を表すことができる。つまり、これらの構造は描写的意味と連用修飾的意味の両方を表すことができる。

(27) *inglex=ez laster mintzo da Mañex*

英語=INST 速い 話す PRS.A3S マネシュ

「マネシュは早口で英語を話している」

(28) *neke=z egin du-t ene bide=a*

難しさ=INST 作る.PFV PRS.A3S-E1S 1SG.GEN 道=SG

「私は苦勞して道を切り開いた」

(29) *igande=etan mahaxin=ak hetxi-ak dira.*

日曜日=PL.INE 店=PL 閉まる.PFV-PL COP.PRS.A3P

「日曜日には店は閉まっている」

また、接尾辞 *-ki* によって形容詞から生産的に派生される様態副詞が、臨時的に B タイプコピュラ文の補語となることがある。このような様態副詞は、もっぱら連用修飾的意味（行為の様態）を表し、B タイプコピュラ文の補語にはならない。B タイプコピュラ文が表す一時的な状態は、普通、形容詞かそれに対応する叙述詞によって表されるからである。しかし、*eder* 「美しい」のような、通常は属性を表す形容詞の場合、B タイプコピュラ補語としての用法が無いことがある。そのようなときには、様態副詞が B タイプコピュラ補

語となるのである。これは、連用修飾句と描写句の意味的連続性によるものと考えられる。

- (30) *Mañex* {**eder*/**ederr-ik*/*ederki*} *da*.
マネシュ {美しい/美しい-PRED/美しい-MAN} COP.PRS.A3S
「マネシュは美しくしている（着飾っている）」

つまり、連用修飾句と描写句は、通言語的にも、バスク語内部でも、連続していると結論できる。ところで、本発表の目的の一つは、B タイプコピュラ文と所在文の関連性を明らかにすることにある。連用修飾句と描写句の連続性を前提すると、両者の関連性は、その補語が連用修飾句／描写句として機能するという点に求めることができる。所在文の述語を構成する場所表現は、連用修飾の機能を持つ。事象の生起する場所を表す連用修飾句として用いられた場所表現は、多くの場合参加者の位置をも表現しているという点で描写句でもある。

この結論は、バスク語フランス方言と同様の *Adjectival N-L-Switching* を示す言語において、所在文 (L) タイプのコピュラ補語が描写句として用いられる、という事実によって支持される。例えば、フィンランド語では、様格が所在文タイプのコピュラ補語と描写句の双方を標示する。

- (31) *Hän on sairaa-na*
3SG.M be.3SG.PRS sick-ESS
“He is sick.” (Fromm and Sadeniemi 1956: 139)

- (32) *Hän kuoli vanha-na*
s/he die-3SG.PST old-ESS
“S/he died old.” (Penttilä 1963)

4. まとめ

本発表では、バスク語の2種類のコピュラ文を取り上げ、Stassen (1997) の類型論における位置づけを検討した。A タイプコピュラ文のコピュラ補語は名詞句と同じ構造を持っており、名詞述語文との関連が明らかである。一方B タイプコピュラ文と所在文の関連性は、その補語が描写句／連用修飾句として機能する点にあると結論した。Stassen (1997) においては、所在文の補語について連用修飾の面が強調されているが、描写句と連用修飾句の連続性 (Schultze-Berndt & Himmelmann 2004) を踏まえることで、この現象のより適切な理解が可能になると考える。

略号一覧

The Leipzig Glossing Rules に従った。独自の略号は以下の通り。A: 絶対格項の一致、ASSOC: associative、E: 能格項の一致、ESS: 様格、MAN: 様態、s: 単数との一致、P: 複数との一致、PRED: 叙述詞。

参考文献

- Fromm, H. and Sadeniemi, M. (1956) *Finnisches Elementarbuch, i. Grammatik*. Heidelberg: Winter.
Goddard, Cliff (1985) *A grammar of Yankunytjatjara*. Alice Springs: Institute for Aboriginal Development.
Hale, Ken (1982) Some essential features of Warlpiri verbal clauses. In Stephen Swartz (ed.), *Papers in Warlpiri grammar, in memory of Lothar Jagst*, 217-315. Berrimah, N.T.: Summer Institute of Linguistics.
Lafitte, Pierre (1944) *Grammaire basque: Navarre-labourdin littéraire*. Bayonne: Le Livre.
Penttilä, Aarni. (1963) *Suomen Kielioppi*. Porvoo: Werner Söderström Osakeyhtiö. 2nd edition.
Rijk, Rudolf P. G. de (2008) *Standard Basque: A progressive grammar*. Cambridge, MA: The MIT Press.
Schultze-Berndt, Eva & Nikolaus P. Himmelmann (2004) Depictive secondary predicates in crosslinguistic perspective. *Linguistic Typology* 8, 59-131.
Stassen, Leon (1997) *Intransitive predication*. Oxford: Oxford University Press.

謝辞 本研究は JSPS 科研費 26-10744 の助成を受けたものです。ここに記して感謝します。